

地歴・現社・倫理は“概ね良好”、 政経は“学力不足”目立つ！

政経の勉強、「大切」8割以上だが、「好き」は4割弱

旺文社 教育情報センター

平成 17 年 4 月

文部科学省(以下、文科省)は平成 15 年 11 月、全国の高校 3 年生 10 万 3 千人を対象に「教育課程実施状況調査」(地歴・公民の学力調査)を実施し、その調査結果を先ごろ公表した。世界史、日本史、地理、現代社会、倫理は文科省のほぼ期待どおりの成績であったが、政治・経済は同省の期待した成績を下回り、学力不足が目立った。

この他に実施したアンケート結果と地歴・公民の各得点の相関関係をみると、学ぶ意欲が高く、基本的な生活習慣を身につけ、新聞やインターネット等を情報源として活用している生徒ほど得点が高い傾向にあった。

以下に本調査結果のポイント等を紹介する。

調査の概要等

【調査の趣旨】平成 14 年度までの高等学校学習指導要領(旧教育課程；平成元年告示)の下での生徒の学習状況を把握するため、調査を実施。

【調査時期】15 年 11 月

【調査対象】国・公・私立高校(全日制課程)の約 1,400 学科の 3 年生約 10 万 3 千人(全 3 年生の 8%)

【調査内容】地理歴史(世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B)、公民(現代社会、倫理、政治・経済)の 2 教科 9 科目について、ペーパーテスト(学力調査)を実施。また、高 3 生に対して、「学習意欲等に関するアンケート調査」も実施。

なお、国語、英語、数学、理科については 14 年 11 月に同様の調査を実施済み(調査結果の詳細は、2004 年 3 月 2 日付の当コーナーで既報)。

ペーパーテストの結果

1. 期待正答率との比較

文科省は、高 3 生の学習状況を把握するため、地理歴史(世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B)、公民(現代社会、倫理、政治・経済)のペーパーテストを行い、このテストの正答率と期待正答率(表 1 の注 1)との比較を行ったところ、以下のような特徴がみられた(表 1 参照)。

世界史 A、世界史 B、日本史 A、日本史 B、地理 A、地理 B、現代社会、倫理の各科目とも、正答率が期待正答率を「上回る」か「同程度」と考えられる問題数（表 1 の「(a) + (b)」欄）が総問題数の半数以上を占めており、“おおむね良好”であった。

領域別に見ると、正答率が期待正答率を「上回る」か「同程度」であった問題数は、世界史 B の「近代と世界の変容」で 10 問中 9 問、日本史 B の「近代日本の形成とアジア」で 9 問中 6 問、地理 B の「生活と産業」で 13 問中 12 問、現代社会の「現代社会における人間と文化」で 13 問中 11 問、倫理の「国際化と日本人としての自覚」で 15 問中 11 問もあり、いずれも各領域全体の半数を超えた。

政治・経済では、正答率が期待正答率を「上回る」か「同程度」であった問題数が 25 問と、総問題数（51 問）の半数未満となっており、“学力不足”が目立った。

領域別に見ると、正答率が期待正答率を「上回る」か「同程度」であった問題数は、「現代の経済と国民生活」では 24 問中 14 問あったが、「現代の世界と日本」では 7 問中 2 問、「現代の政治と民主社会」では 20 問中 9 問しかなかった。

地歴・公民の科目別の正答率 vs 期待正答率（高校 3 年生対象） <表 1>

区分	問題数	正答率が期待正答率を上回った問題数(a)	正答率が期待正答率と同程度の問題数(b)	小計 (a) + (b)	正答率が期待正答率を下回った問題数	正答率 (%)	期待正答率 (%)
世界史 A	53	13	16	29	24	51.4	54.6
世界史 B	50	13	16	29	21	48.1	50.4
日本史 A	55	12	20	32	23	53.3	56.9
日本史 B	58	19	13	32	26	54.7	56.7
地理 A	53	20	14	34	19	53.8	54.7
地理 B	57	19	21	40	17	57.0	56.0
現代社会	54	20	17	37	17	58.3	58.9
倫理	46	20	10	30	16	65.4	64.1
政治・経済	51	15	10	25	26	53.6	58.7

注 1 . 「期待正答率」とは、学習指導要領に沿って標準的に学習活動が行われたと想定した場合の個々の問題の正答または準正答の割合。期待正答率を中心に上下それぞれ 5 % の幅を設け、実際の正答率が、この幅を上回っていれば「期待正答率を上回る」、この幅に収まっていれば「期待正答率と同程度」、この幅まで達しなければ「期待正答率を下回る」とした。右端の「期待正答率」は、各問題の期待正答率を単純平均した数値。

注 2 . 右端から 2 列目の「正答率」は実際の正答率で、各問題の正答または準正答の割合を単純平均した数値。

2. 科目別の分析状況

今回の調査から判明した「各科目の特色」および「教師の指導上の改善点」は表2のとおり（地歴A科目は省略）。生活に身近な内容を扱った問題は、文科省のほぼ期待以上に出来た問題が目立ったが、「基本的な事項・概念の理解や、全体の流れの中で把握したり、総合的に捉える力、資料を活用して自分の考えを表現する力が不十分」である実態が浮き彫りになった。

高校教師には、そうした生徒の実態に対処すべく、実生活と関連付けて関心を高めさせたり、具体的事例を取り上げて理解を深めさせたり、歴史の流れの中で時代の特色を捉えさせるような指導上の工夫が求められる。また、地図や地球儀、新聞記事、インターネット等を積極的に活用させることも必要だ。

各科目の特色&指導上の改善点

<表2>

科目名	調査結果の特色	教師の指導上の改善点
世界史B	<p>帝国主義とアジア・アフリカに関する問題の多くは、文科省のほぼ期待以上に出来ている。</p> <p>「冷戦下のソビエト連邦の動向」や「パレスチナ問題の推移」など、世界史の基本的な事項の知識・理解が不十分。</p> <p>「二つの大戦と世界」や「国際対立と国際協調」「これからの世界と日本」など、現代の人類が直面する課題を扱った内容については、「普通の生活や社会生活の中で役に立つ」と肯定的に回答した生徒が多い。</p> <p>「テーマを設けて討論したり、調べる学習」や「レポートや報告書にまとめたりすること」などについては、いずれも「ほとんど（全く）行っていない」と回答した生徒が半数以上であった。</p>	<p>生徒の課題解決的な学習、テーマを設けて調べる学習及び討論を取り入れた授業など、生徒の学習意欲を高めるための工夫改善が重要。</p> <p>近現代史においては、有用性を感じている生徒が多いことを踏まえ、現代の世界の理解に役立つテーマを課題として追究させる指導の工夫が特に重要。</p> <p>世界の歴史の大きな流れに位置付けながら、前近代、近現代ごとに内容を重要事項に重点化し、指導計画を適切に作成して、理解の徹底を図ることが重要。</p>
日本史B	<p>生徒の身近な生活文化に関わりのある「室町時代の文化」や「江戸時代の庶民文化」に関する問題の多くは、文科省のほぼ期待以上に出来ている。</p> <p>近現代史に関する基本的な事項の理解が十分とはいえない。</p> <p>個々の資料が示す歴史的事象については内容や意味を理解していても、複数の資料を比較し共通点を考察したり、複数の視点から資料を考察する力が不十分。</p> <p>「武家政権の成立と文化の新気運」については、教師は「生徒には理解しやすい、興味を持ちやすい」と回答している一方、生徒は「よく分からなかった」「きらいだった」と答えるなど、内容によって教師と生徒の意識の違いがみられる。</p>	<p>近現代史における基本的な事項の理解を深めるため、細かな事象の年代や内容を網羅的・羅列的に教え込むのではなく、内容の重点化を図って時代を大きく総合的にとらえさせることが必要。このため、テーマを決めて生徒に年表を作成させたり、生徒の興味や関心のあるテーマを設定して学習させることなどが有効。</p> <p>文献、画像など様々な資料を提示して生徒の視点で調べさせ、その結果や経過を発表させることで考察を深めさせる学習が重要。</p> <p>生徒に歴史学習への興味を持たせ、理解を深めさせるよう、生徒の理解の状況を把握したり、教材開発に努めるとともに、作業的・体験的な学習を取り入れるなどの工夫改善が重要。</p>
地理B	<p>農業・工業などの立地や、地域の変容を理解・考察する問題の多くは、文科省のほぼ期待以上に出来ている。</p> <p>地域に関する情報を地図化・グラフ化したりする作業的な学習活動が不十分。</p> <p>自然環境や社会環境に関わる基礎的な地理的事象について、意味内容の理解が不十分であり、位置、分布と結び付けた知識として身に付いていない。</p> <p>「日本・世界各地の自然や人々の生活を扱ったテレビ番組をよく見ていますか」との質問に対しては、約5割の生徒が肯定的に回答している。</p> <p>課題解決的な学習等に関しては、「野外に出て観察したり調査したりする学習は好きですか」との質問に対して、他の学習方法より肯定的に回答している生徒が</p>	<p>地理情報の処理や表現に関する技能、特に地理的事象を適切に地図化する技能などを身に付けさせる学習活動を、年間指導計画の中に継続的・計画的に位置付けることが大切。</p> <p>基礎的な地理的事象については、一つの項目での指導だけにとどまらず、関連する項目においても繰り返し取り上げるよう工夫し、他の事象と関連付けるなど、多面的・多角的に考察させながら身に付けさせることが重要。</p> <p>教材開発や授業方法の工夫に当たっては、日本や世界各地の自然や生活を扱った新聞記事やテレビ番組などへの生徒の関心の高さや、野外での観察・調査の学習への好感度の高さを手掛かりとすることが有効。</p>

科目名	調査結果の特色	教師の指導上の改善点
現代社会	<p>「民主社会の倫理」や「環境と生活」に関する問題の多くは、文科省のほぼ期待以上に出来ている。 国際社会と人類の課題の内容に関して、国際法など基本的な事項や概念が十分に定着していない。 表やグラフなど複数の資料から有用な情報を読み取り表現する力が不足。 身近な事例と関連付けた問題は、正答率が期待正答率を上回る傾向がみられた。</p>	<p>国際政治をとらえる基本的な概念である主権や国際法等について、具体的な事例を取り上げて理解させるとともに、東西冷戦など歴史的な背景を踏まえた指導が大切。 内容の異なる複数の資料から有用な情報を読み取らせ、それぞれの情報の関連を議論させたり、文章にまとめさせたりするなどの指導の工夫・改善が重要。 生徒に現代社会に対する興味を持たせるため、新聞やインターネットなどを活用して時事的な話題を授業で扱ったり、作業的・体験的な学習を取り入れたりすることが大切。</p>
倫理	<p>「日本の風土と日本人の考え方」に関する問題の全てが、文科省のほぼ期待以上に出来ている。 人間としての在り方・生き方、自己の生き方と関連付けられた知識・理解が不十分。 複数の資料を多面的・多角的に考察することによって、原因や社会的背景を考えるとともに、課題を見出し、自己の生き方について探求する力が十分に付いていない。 ほとんどの内容について、教師は「生徒が興味を持ちやすい」と回答する割合が高いが、生徒は「きらいだった」と回答する割合が高く、教師と生徒に意識の違いがみられる。</p>	<p>生徒が自己の人格形成とともに、学習内容を社会の一員としての自己の生き方と関連付けながら主体的に追究していけるような指導の改善が必要。 先哲の思想に関する学習については、網羅的に取り上げるのではなく、視点を明確にし、倫理的課題に対して先哲がどのように考えたかを、自己の生活や生き方と関連付けて考えさせる指導が重要。 生徒が倫理の学習に興味を持ち、倫理的課題を自ら見出し、人間としての在り方・生き方について主体的に探求を深められるよう、インターネットや学校図書館などを活用した授業、観察や調査・見学・体験を取り入れた授業、調べたことを発表させる活動を取り入れた授業などを工夫することが大切。</p>
政治・経済	<p>文科省のほぼ期待以上に出来た問題数が全体の半数に達しなかった。 「経済生活に関する諸課題」についての問題の多くは、文科省のほぼ期待以上に出来ている。 インフレーションなど、政治や経済についての基本的な概念が十分に身に付いていない。 国際社会の諸問題を総合的に捉える問題や、司法に関する問題については、正答率が期待正答率を下回る傾向がみられる。 時事的な出来事や身近な事例を取り上げた問題は、正答率が期待正答率を上回る傾向がみられる。</p>	<p>政治・経済を指導するにあたっては、時事的な話題を取り扱ったり、理論と現実の相互関連について十分配慮したりして、生徒の関心を高めるような授業の工夫・改善が求められる。 政治や経済についての基本的な概念を身に付けさせるため、具体的な事例を取り上げたり、歴史的な背景を示したりしながら、理解を深めさせる指導が重要。 国際社会の諸問題について、政治と経済を関連させて総合的にとらえさせる指導が重要。 司法に関する内容については、裁判所の機構や裁判の手続きなどを詳細に学習させるような指導ではなく、国民の権利を保障する裁判制度の基本的な考え方を理解させるという観点から、取り扱うことが重要。</p>

3. 得点帯別の人数分布

得点帯別の人数分布を見ると、地歴・公民のどの科目も次に示した得点帯をピークとして正規分布に近い分布を描いており、学力の二極分化という状況はみられない（人数分布は、平均点 500 点、1 標準偏差 100 点とする得点の標準化を行った結果である）。

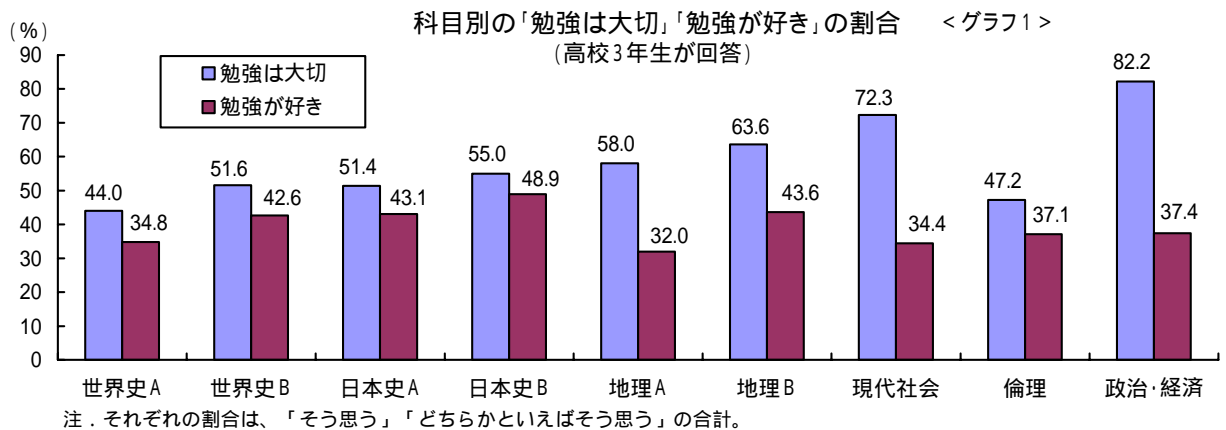
世界史 A = 475 点以上 525 点未満 / 世界史 B = 425 点以上 475 点未満 / 日本史 A = 525 点以上 575 点未満 / 日本史 B = 525 点以上 575 点未満 / 地理 A = 475 点以上 575 点未満 / 地理 B = 525 点以上 575 点未満 / 現代社会 = 525 点以上 575 点未満 / 倫理 = 525 点以上 575 点未満 / 政治・経済 = 525 点以上 575 点未満。

アンケート調査の結果

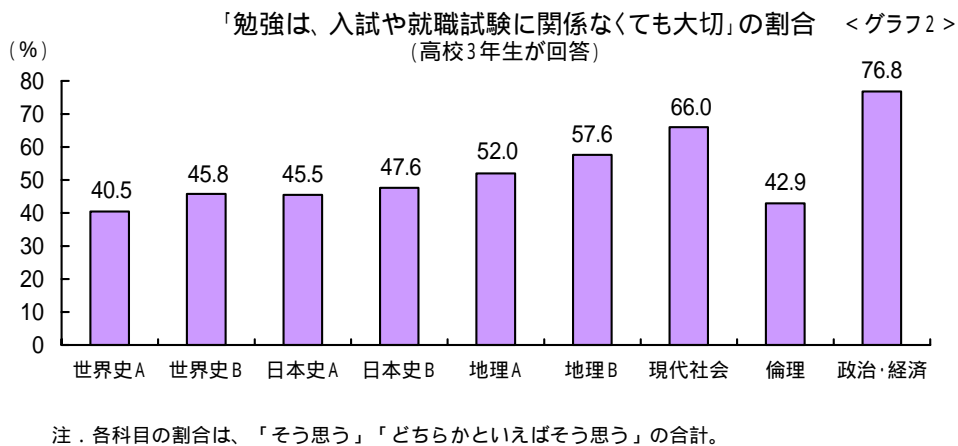
文科省はペーパーテスト（学力調査）と合わせて、高3生を対象に「学習意欲等に関するアンケート調査」も実施した。

この調査結果を見ると、地歴・公民の科目で「勉強は大切」と答えた者の割合は、政治・経済が82.2%と最も大きく、次いで、現代社会(72.3%)、地理B(63.6%)、地理A(58.0%)、日本史B(55.0%)などとなっている(グラフ1参照)。

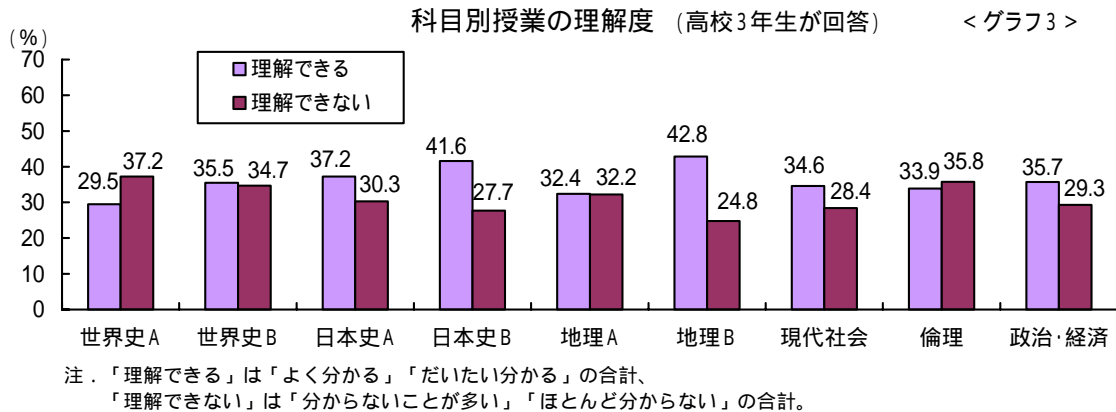
しかし、地歴・公民の各科目とも、勉強が「大切」より「好き」の割合の方が低くなっており、この割合の差(「大切」-「好き」)を見ると、政治・経済の44.8ポイントを筆頭に、現代社会(37.9ポイント)、地理A(26.0ポイント)、地理B(20.0ポイント)、倫理(10.1ポイント)などの順になっている。とくに政治・経済は、高3生の8割以上が勉強は「大切」と考えていながら、「好き」な者は4割弱に留まっており、こうした関心の低さが学力不足を招いている要因ともいえよう。



さらに、地歴・公民の勉強は、「入試や就職試験に関係なくても大切か」と聞いたところ、各科目とも「大切」と答えた者の割合は、前述の「勉強は大切」の割合(グラフ1)と比べて3~7ポイント程度小さくなっているが、割合の大きさは同じ順位となった(グラフ2参照)。



また、地歴・公民の科目別に授業の理解度を見ると、授業が「理解できる」と答えた者の割合は、1位＝地理B（42.8％）、2位＝日本史B（41.6％）、3位＝日本史A（37.2％）、4位＝政治・経済（35.7％）、5位＝世界史B（35.5％）、6位＝現代社会（34.6％）などとなっている（グラフ3参照）。これらの「授業が理解できる」割合と、前述の「勉強が好きな」割合（グラフ1）の順位を比較すると、世界史Aと現代社会以外は、各科目とも順位がほぼ似ており、勉強が好きな者ほど、授業も理解できる傾向にある。



アンケート調査とペーパーテストの結果との関係

文科省では、アンケート調査とペーパーテスト（地歴・公民）の結果との関係について、次のように分析している。

教科の勉強が「好きだ、大切だ」「入学・就職試験に関係なく大切だ」と考えている、学ぶ意欲の高い生徒は、ペーパーテストの得点が高い傾向がみられる。

「授業の中で分からないことを授業終了後に先生にたずねに行く」「塾・予備校、家庭教師の先生にたずねる」「自分で調べる」といった生徒は、ペーパーテストの得点が高い傾向がみられる。

「自分の好きな仕事につけるように勉強したい」「日常生活の中で、役立つように勉強したい」と、職業や実生活との関連を意識している生徒は、ペーパーテストの得点が高い傾向がみられる。

毎日の朝食、持ち物の確認など、基本的な生活習慣が身につけている生徒は、ペーパーテストの得点が高い傾向がみられる。

普段から、インターネットや新聞を活用して、世の中の情報を入手している生徒は、ペーパーテストの得点が高い傾向がみられる。

調査結果を今後の教育政策に反映

今回の調査は、14年度までの高等学校学習指導要領（旧教育課程）の下での、高3生の学習状況を把握する目的で実施され、地理歴史と公民の現代社会、倫理の成績は“概ね良好”だが、政治・経済の“学力は不足”している実態が数字で裏付けられた。

今回の調査では、「新聞やインターネットを情報源として活用」したり、「教科の勉強が入試や就職試験に関係なく大切だ」などと考えている生徒ほど、ペーパーテストの成績が

良くなっているため、高校教師には生徒の学習意欲を引き出すための動機付けが必要である。なお、今回の学力調査とは別に、中央教育審議会（以下、中教審）でも、全国的な学力調査の実施に向けて、実施内容や方法等について検討し、17年秋頃までに取りまとめる予定だ。また、中教審は到達目標の明確化、義務教育制度の弾力化に対応した教育課程の在り方についても検討するという。

そうした中、文科省には今回の学力調査の結果をもとに、学力低下の要因を追究し、今後の教育政策や学習指導要領の見直しにも反映させることが求められる。